

A study of growing enriched feelings and expressions : Education through art for elementary school teachers (For practice)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24693

豊かな心と表現力を育てる(V)

— 図画工作の授業を通して (実践編) —

向坂 一 弥 丸尾 ときわ* 川村 稔 子**

A Study of Growing Enriched Feelings & Expressions

— Education Through Art for Elementary School Teachers (For Practice) —

Kazuhiro KOHZAKA Tokiwa MARUO Toshiko KAWAMURA

はじめに

— 子どもを取り巻く環境と子どもの実態から

教材を考察してみる —

教材論を語るには、まず 子ども達がおかれているさまざまな環境を見直した上で、今の子どもには、何が足りないのか、どんな態度や能力を身につけることが必要なのか、そのためにはどのような教材が相応しいのかが論じられなければならない。

我が国が「経済大国」という言葉に象徴されるように、多方面にわたって発展したかのように思われている。しかしながら、物の豊かさの陰には「公害」「自然破壊」などといった取り返しのつかないような現状を引き起こしてしまった社会環境がある。これらの大きな原因の一つに我が国の誤った教育があったと言えないだろうか。開発という名のもとで、自然破壊が進み、動植物ばかりか人間の生命までも脅かしつつある今日、ようやく、地球規模で、環境保護が提唱されてきている。子どもたちを対象に環境教

育も行われ始めているが、環境破壊を起こしてしまったのは我々大人であり、ここに至った社会状況を分析し、子どもたちには二度と過ちを繰り返すことのないよう、人間教育としての学校教育が切に望まれている。

知識のつめ込んだ量を試すような受験体制では、真の人間形成のための教育は行われぬ。このことは、誰もわかっているはずであるのに、一向に改まることのない現実が、我々の住む社会も未来も、子どもたちの心もどんどん暗くさせている。こうした学校の中で起こっている登校拒否・非行・落ちこぼれなどは、幼い純真な子どもたちの今の間違った社会に対する悲痛な抵抗といえそうである。何のために勉強するのか、将来どんな人間になりたいのかといったことについて、希望の持てるような社会を子どもたちに与えていないからではなからうか。現代社会におけるさまざまな矛盾点を敏感に感じ取り、みんなと同じことができないで葛藤し苦しんでいる子どもたちにこそ、親が教師が温かい眼差しで、子どもの気持ちをわかってやら

平成6年3月30日受理

* 金沢市立千坂小学校教諭

** 金沢市立浅野町小学校教諭

うとすることが先決である。一人で悩みかたくなに閉じてしまっている子どもの心を聞くことができた時、本音で語ることができ、子どもが変わるだけでなく我々大人が変わらなければならないことを暗示し、社会も教育も変えていかなければならない警告を発しているを受け止めたい。家庭や学校で問題をかかえている子どもから我々大人が学ぶところは大きい。そして私達が教育を社会を人間が人間らしく生きていくのに相応しい環境へと変えていく努力をしなければならない。

最近、「今の子どもは感動がない」とか「やる気がないのはどうしてか」ということが社会問題となっている。「感動」というものは、自分自身が実際に体験して初めて得られるものである。今の子どもたちの生活の中で、体を通して知るといった生活経験は果たしていくつあるのだろうか。生まれた時から非常に多くのおもちゃを与えられ、食べ物や衣服にしても何不自由なく育ててきている。そして何よりも子どもの生活や身体を、心までも脅かしているのは、長時間のテレビ・ビデオの視聴やファミコンの流行、更には受験体制に備えるための塾通いが挙げられるであろう。体を動かして遊べるような安全な環境はなく、車社会は、どこも交通事故の危険がいっぱいである。座ったままで身体を全く動かすことをしないで、何時間となく子どもの生活時間を占領しているテレビゲームに代表されるような子どもをターゲットとした商魂の逞しさも子どもを蝕み、社会を害していると言えないだろうか。こうした中では、子どもの体力は衰え、精神的にも弱く、少し身体を動かしただけですぐに「疲れた！」を連発するのも無理はないように思われる。それで何をやっても根気がない、馬力がないということになるのであるが、このやる気については、もっと大きな問題を孕んでいると言える。やる気は、めあてがあって初めて生まれるものである。人間本来の目標を失ってしまっているような現代社会にお

いては、繊細な精神の子どもはみんなについていくことに関心や意欲がもてなくて、いわゆる「はみ出し・問題児」となる。しかし、こういった子どもたちの言動を見守り子どもたちの視線まで下りて、真正面から向き合って、時間をかけて、心を込めて、一人の人間として真摯な態度で接していくことが、現代社会の悪を矛盾を見つめ直す第一歩であると考えられる。

以上のような現状をふまえて、21世紀を担う子どもたちが羽ばたけるように芸術による教育を学校教育の大きな柱として位置づけなければならない。

そのためには、小学校図画工作の教材として、自然とのふれあい、人間同士の好ましいかかわり、豊富な材料体験、そして何よりも夢のある楽しい創造活動の展開が求められる。

子ども達に喜びのある活動をと、今 家庭でも少なくなってきているふれあい—自然・人・もの・こころ—を大切にし、一人ひとりの子どもたちに豊かな心の育成を願って、図画工作特有の表現活動を伴う実践を重ねてきた。

今回は、「図画工作での三つの約束」をはじめとして、「表現活動に喜びを」「意欲をもって取り組ませる手だて」「イメージを広げ活動に見通しをもたせるために—製作・鑑賞カードの活用—」「お互いの作品を見せ合う場を」「楽しい学校の環境づくり」を中心にして指導・実践したことをまとめてみた。

I. 図画工作では—図工室での三つの約束—

子どもたちは絵をかいたり、ものをつくったりすることが大好きだ。週一回の図工の時間をとても楽しみにしている。「今度は何をつくるの?」「ぼくたちもあんなの早くつくりたい。」と図工室にやって来る子どもたちは目を輝かせ語りかけてくる。

図工専科として赴任し、図工と関わるように

なって三年目。どうしたら子どもたちが意欲的に取り組み、完成の満足感を得ることができるだろうかと手さぐりの毎日であった。実践を重ねていくうちに、図画工作という教科が、造形的な創造力を育てるのみでなく、子どもたちの心の成長にいかに関わっている教科かということに改めて強く考えさせられた。

初めての図工の授業では、私自身の思いを「図工室での三つの約束」として話して聞かせ、常時この三つのことに立ち戻りながら子どもたちに豊かな心と確かな表現力を育てたいと考え、授業実践を進めてきた。

1. 作品を大切に

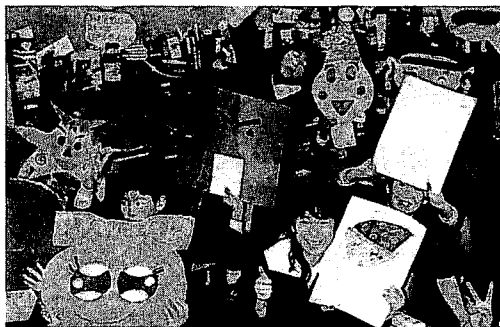
作品は、図工の時間にどれだけいっしょうけんめい取り組んだかがあらわれた自分の（その人の）分身のようなものである。「じょうず」「へた」は問題ではない。いっしょうけんめいやってもうまくできない人もいれば、遊び半分で、ふざけてやっても「じょうず」な人もいる。しかし、作品には、いっしょうけんめいやっていれば、いっしょうけんめいさが、ふざけてやっていたらそれがちゃんと表れてくるものである。

図工は、うまい絵をかいたり、うまく工作を作ったりすればよいという教科ではない。自分の思ったことや感じたことをどんなふうにあらわすか考えたり、難しいと思われることをできるようにしようと努力したり、自分の持っている力を出していっしょうけんめい取り組むことで人間として大切な心を育てるようにする教科である。

他の教科のように、答えがひとつではない。テストで〇〇点というように点数があるわけでもない。30人いれば30通りの答えが出る。どの作品も、その人がいっしょうけんめいに、自分の持っている力を出そうと取り組んだのならどれもすばらしい。

だから、作品は自分のものだけでなく、友達のものも大切に思っていてほしい。持ち帰る時は、

必ず担任の先生にも見ていただくこと。そしておうちの方にも必ず見せること。途中に、ごみばこに入れたり、道にすてたりは絶対にしないこと……。



「やったア！ 完成だ！」 ふしぎな仮面 - 4年-

2. 用具は正しく安全に

図工では、今までに使ったことのない用具、道具を使うことになる。正しく使えばとても便利で、自分の作品をつくるために大いに役立ってくれるものである。



「のこぎりの刃を見る目の位置を変えると、まっすぐ切れるよ。」

しかし、正しい使い方をせず自分勝手な使い方をしたり、ふざけたり、遊び半分で使うとけがをしたり、友達にけがをさせたり、大切な命を失ったりすることにつながることもある。

新しい用具を使う場合には、必ず使い方を教えるので、それを守って用具を役立ててほしい。

3. あとしまつはきちんと

かたづけやあとしまつも図工の学習の大切な活動である。自分のまわりからグループのまわり、図工室全体に目を向けて、気づき 実行しよう。たくさんのクラス、たくさんの人が図工室を使うので、次に使うクラスが気持ち良く使

表1 図工室に掲示 「図画工作では」

図画工作では、じょうずに絵をかいいたり
 ものを作ったりすることだけが、
 めあてではありません。
 じょうずにかこうとするよりも、
 自分が、見たり、感じたりしたことを
 もとに、考えてかくことです。
 考えて、ものを作り続けていると、
 必ず、じょうずになります。
 じょうずになるだけでなく、
 人としての感じ方が、育ちます。
 大むかしから、人間は、
 絵をかき続け、ものを作り続けて、
 「自然」の大きさを知り、
 どんな人間になることが大切かが、
 わかってきたのです。
 「人間の心」を育てる、
 これが、図画工作のめあてです。

い、図工が楽しくできるようにしてほしい。

入った時以上にきれいにして、教室を出るつもりで……。

II. 表現活動に喜びを

子どもたちが個々の思いを大切にしながら、イメージ豊かに製作活動を進めることができたならば、満足感や喜びは大きいであろう。またそのことによって表現活動は豊かになると考え、次の題材によって実践を試みた。

1. ぼくの、わたしのタイムカプセル（4年）

「20才になったらあける、ぼくの、わたしのタイムカプセル」は、子どもたちにとって夢があり興味・関心を引き起こして製作意欲を大いにかきたたえた。通常、「タイムカプセル」と言えば地面に埋めておいて何年か後に掘り起こすというものを想像してしまうが、本題材の「タイムカプセル」はそうではない。家の中の自分の身近に20才になるまで飾っておくということを前提としている。

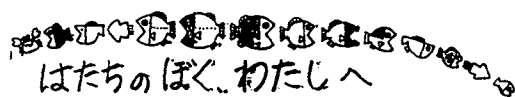


写真3 「ぼくのは 船の形だよ。」

そのため、製作過程において美しく飾りたいという意欲が子どもたちの造形に対する多面的なイメージを豊かなものにしていったと思われる。

また、子どもたちの自由な発想を生かしながらつくりたいものをつくらせた。アイディアスケッチや設計図を描かせることで製作の見通しを持たせ、基本の形を身近材を使って組み合わせさせた。

子どもたちは、「宇宙船」「ロケット」「ペンギン」「うさぎ」「家」など自由な発想で、「20才に



はたちのぼく、わたしへ

1992年 6月16日

4年1組 平内勇牙 -11時0分

8日
10才 月

20才のぼく元気ですか。10才のぼくは元気です。
ぼくは 学校の園エでタイムカプセルの言う物を
作っています。空きかんを使って自分の好きな形を
作り、空きかんの中に自分の宝物と20才への君の
手紙を入水して、20才になったらタイムカプセルをこ
ねて中を開けて、10才のなつかしい思い出を思い
出すすてきな物を作っています。20才のぼくは、
働いてリハにくらしていますか。ぼくはお父さん、

お母さんのおかげで10才まで育ててくれ



ました。ぼくは20才になったら働いてお父さんやお
母さんのようにリハは大人になりたい。

平内勇牙より



カード1 はたちのぼく、わたしへ

なったらあける自分だけのタイムカプセル」をつかっていった。教師が作品のテーマを絞って製作させるのと異なり、個々の思いを大切にしたい製作活動が意欲的に展開されたと思われる。

さらに、自分の小さな宝物や思い出の品物、20才の自分への手紙を書き封入した。両親から手紙を書いてもらった子もいれば、入学式の写真や生まれた日の新聞を入れた子もいた。20才になって開ける時の自分やその時の気持ちを想像することによってタイムカプセルに対する思いは次第に大きくふくらんでいったように思えた。このことは製作意欲をよりいっそう高め、完成時への期待感を持たせることができた。

2. わたしの見つけた風景 (6年)

子ども達が6年間通い慣れた道や見慣れた風景も屋上から見ると、今までと全く違った印象を受けると同時に新たな発見もある。自分たち

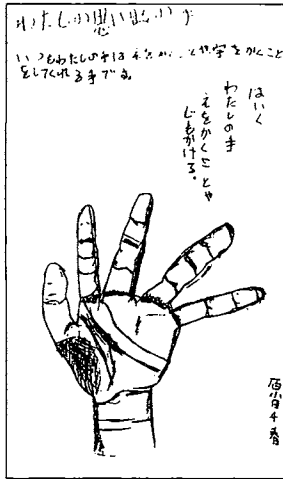
の住んでいる町やそこに息づく自然の素晴らしさを改めて感じとることができるであろう。

本題材では、屋上で写生を始める前に和紙をくしゃくしゃに丸め、それをていねいにのぼし広げた。次に刷毛に水をたっぷり含ませて和紙をぬらし乾かないうちに墨の濃淡を生かし雲を描いた。絵は白い画用紙で描くものという概念を覆し、しわしわの和紙にわりばしと墨で描き始めた子どもたちは、完成まで意欲を持ち、取り組むことができた。

3. ぼくの手・わたしの手 (2年)

「手をじっと見つめていると、いろんなものが見えてくるよ。そして、手はいろんなことを話してくれるよ。」こんな問いかけから自分の手を描き始めた。

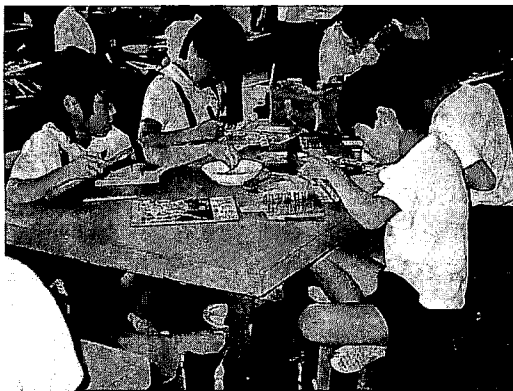
ふだん何気なく使っている手を改めて見つめ直すことは、自分の心を見つめ直すことにつな



- ・春の手に 思い出いっぱい つまってる
- ・手の間 ^{あいだ} 草の目みたい おもしろい
- ・ぼくの手は しごとをできる べんりだな

4. くぎうちあそび (3年)

かなづちでくぎを打つのはとても快いものである。高学年が使った板の切れはしや角材、不用になった台本板の中から自分の好きな木片を選んで、自由にくぎを打って遊ばせた。無意識に打っているうちに、子どもたちの活動が広がっていった。深く打ち込む、木と木をつなぐ、途中で止める、並べて打つ、思い通りに打てずくぎを抜くなど、試行錯誤の連続の中からくぎを打つことに楽しみを見い出すと共に新しい形が発見できた。



「たくさん打てたぞ。」

がるのではないだろうか。

自分で思い思いの題名をつけ、手に対する思いを簡単な文章で表した。このクラスでは俳句の指導が年間を通じて行われてきたこともあり、俳句や川柳で自分の思いを表している子どもも多く見られた。

ロボットや動物のような形に組み合わせたり色をつけたり、糸やひもをまきつけて結んでみたり、ビー玉をころがしてゲームを作る子ども見られた。

遊びを通じて、道具を使う技能と造形的なものを見方を育てることのできる題材であった。

III. 意欲をもって取り組ませる手だて

子どもたちの発想を広げ、意欲をもたせるためには、子どもたちが夢中になる要素を生かした題材であること、新鮮味のある身近な素材であることではないだろうか。このことを具体化するために、次の方法によって実践を試みた。

1. わくわく大ぼうけんゲーム (3年)

子どもたちは遊び道具を作るのが好きである。特にゲームには興味を示し、いつまでも根気強く作るものである。しかし現状ではテレビゲームをはじめあまりにも多くの既成のおもちゃ、ゲームが子ども達の前に出そろっている。そして、子ども達の遊びの中に占めるテレビゲームの割合は大きく、話題に欠かすことのないほどである。

そこで、テレビゲームが持つ子どもたちが夢中になる要素を生かし、子どもらしいアイデアや造形的な工夫を利用したぼうけんゲームを作らせることを考え、題材化したものである。



「ゲームができた！ 交換して、遊んでみたよ。」

ゲームの内容をどのように具体化するか、それも造形的により美しくつくることも大いに工夫させるポイントになる。

ここでは素材としてダンボールを使っている。子どもたちは、ダンボール＝箱というイメージを強く持っていると考える。ダンボールからは、かたい感じや加工しにくい感じを受けるが、使い方によっては立体的になりやすい特長があり、切る、折る、表面をはがす、はる、はり重ねるなどができ、子どもたちの発想をより広げるものである。

また、ダンボールは子ども達の身近にあり、日頃何気なく見ているものであるが、図工科でものをつくり出す素材として見直すことで新鮮味があり、意欲を持たせ発想を広げる原動力となると考えた。

さらに、素材を教師の側から与えるのではなく自分で探し集めて持ってくるという活動をさせることで、素材に対して自分の思いが入ることに深くつながり、このことが意欲的に取り組み、主体的に造形活動を進めていこうとする態度を育てる手だてのひとつとなった。

導入時に、ダンボール板の上にビー玉を置き板を動かしてビー玉のころがりまわる様子やダンボール板からころがり落ちていく様子を見させることによってゲームを想像させた。

ダンボールという新素材とビー玉のころがるおもしろさを生かし、ストーリー性を持つぼうけんゲームや迷路ゲーム（ビー玉を主人公に見立て、迷路の中をぼうけんしながらゴールめざして進ませる……etc）など原案を出し合い、アイデアを図やことばで表すことによって発想をより明確にして製作活動に取り組むことができた。

2. しゃぼん玉とばそ（2年）

「今日はすてきなものもってきたよ。」

「何?」「見せて!」

- ・そっとふいてしゃぼん玉をつくる。
- ・大きくできたしゃぼん玉の下から風を送り、

高い所にまでふわふわと動かす。

- ・子どもたちの間を歩きながら小さなしゃぼん玉をいくつも吹き散らす。

「きれい!」

「上へいったら色が変わったよ!」

「すぐおちてわれてしまった。」

「机の上におちてもわれないよ」など子どもたちはしゃぼん玉を見ながら思い思いにつぶやいている。

しゃぼん玉は子どもたちにとって夢のある題材である。さまざまに色変わりし、風にふかれるるとふわふわとさまよい、ふいにパチンとこわれてしまう様子は様々なイメージをふくらませてくれた。

一人ひとりにしゃぼん玉液を与え、自分の好きな場所へ行ってしゃぼん玉を吹かせた。図工室の中で、玄関で、花壇で、コンクリートの上で、窓から外へ、ふき方も様々である。教師のふいたしゃぼん玉を見ている時とはまた違った思いやイメージをふくらませることができたのではないかと考える。

3. 天までとどけ（3年）

じょうぶで、高く立つ工夫をしながら力を合わせてつくり上げていく。身近で扱いやすく、やわらかくもなり、かたくもなる新聞という素材は、子どもたちの意欲を高めた。



4. 自分らしさって何だろう (6年)

「ともこさんへの手紙」画家 日野耕之助

ともこさん、きょうはあなたといっしょに“自分らしさ”とは、どういうものか考えてみたいと思います。ぼくは毎日絵をかいていますが、どんな絵でも、ほかの人にはかけない、ぼくだけの絵をかきたいといつも心がけています。しかし、そのぼくだけにしかかけない絵というのが、なかなかむずかしいのです。

なんでも自分勝手にかけば“自分らしさ”が出るものではありません。絵の場合でも、まず色が美しいとか、形がおもしろいとか、全体のつり合いがとれているとか、いくつかの、どうしても、守らなければならない大事な約束ごとがあります。それを守りながら、かきたいというぼくの気持ちを、いかに正直に、正確に絵に表すかということが大事なのです。

略

本当の“自分らしさ”を身につけるには、毎日勉強して、いろいろのことを体験して、自分をみがき、深めていくことが大事だと思います。絵の世界は、どこまでいってもこれでいいということがありません。絵は一生の勉強だと思います。そして一生かかって、自分らしい、ぼくだけにしかかけない絵をかきたいと思っています。ともこさんも“自分らしさ”を大事に、少しずつ豊かに育てていってください。

1985年の夏

(開隆堂 心のとびらを 図画工作6)

この手紙を読み合い自分らしさについて話し合った。その後、ねん土で半立体的で自分をあらわした。形や色で自分らしさを表す工夫を自分なりに考えるひとつの手だてとなったと考える。

IV. イメージを広げ、製作に見通しをもたせるために — 製作・鑑賞カードの活用 —

自分のもつ作品に対するイメージを図やことばで表すことにより、製作の見通しをもたせることができると考える。さらに、カードを利用し製作過程の中でポイントとなる項目を設けて振り返りをさせることにより、自分の製作過程や作品そのものを見直すことにつながると考える。

1. ずうっとそばに (6年)

題材の流れの中でアイデアを図やことばで表したり、製作途中に気づいたことをメモしたり、アイデアの変更を記入したりして、「書く」ということを取り入れた。

「かく(文字や図など)」ことにより自分の思いや考えをより具体的にイメージ化をさせることにより、子どもたちの製作意欲を持続させていくことができた。

2. つめたい海のあたたかい魚、あたたかい海 のつめたい魚

作品をふりかえってカードに記入することによって自分の作品にこめた思いを改めて認識することができると共に、教師にとっては、個々の子どもの思いを知るひとつの手がかりとなった。

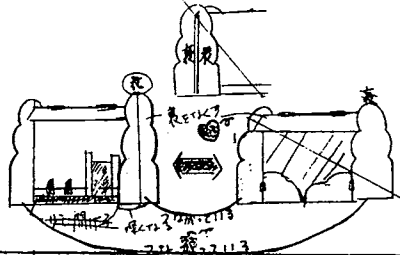
ずうっとそばに

6の2 藤田江利子

- ・つくりたいもの
カセット入紙用小型入紙
- ・使いたい材料
厚紙 厚紙板
画具など
- ・必要な材料用具
カセット
糊
のり
- ・入れるもの
カセット、紙の
小冊
- ・つくる計画
板と木を並べにのりして作る(毛紙板、中央に紙を貼る)
- ・紙を組む方法
・厚紙板を貼る
・カセットを貼る
・紙の間にのりをつけておく

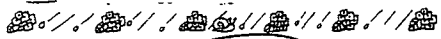
楽しく役に立つ作品をつくらう!

アイデアスケッチ (しくみや構造をくふうして)



日時	おこなったこと	反省
11/6	したき	作った本が厚い板が厚いかな? (紙の厚さを調節しよう)
11/13	試作作り	はにかみやすくて、読めるように 厚紙板がかりのむかし小冊の作りかた
11/20	七カ所	あてがった紙のやり方を見直そう 11/20から、21/15の紙のやりかた
11/27	組み立て	紙を貼る順番と厚紙板の順番 をきいてみる
12/4	組み立て(2)	厚紙板と紙の順番をきいてみる 17.5cm厚紙板の順番をきいてみる
12/11	完成(逆作り)	厚紙板の順番をきいてみる 17.5cm厚紙板の順番をきいてみる
1/8	完成	厚紙板の順番をきいてみる 17.5cm厚紙板の順番をきいてみる

カード2 ずうっとそばに -6年-



題名 魚の絵 11月11日

3年1組 名前 田中 元

魚の絵を書いたらずうっとそばに
たのしくなりました。魚の色をぬって
いじるといい感じがするところがある
(たのしくなりました)と思いました。
また、こまごまとした色をぬると、魚の
中をぬるときれいでいい感じがするところ
と思いました。ぜひもやうかたをいして
もらったときも、ぜひいしてあげたいです。
そしてまた、魚の絵をいして。(おわり)

つめたい海の中で、魚の色をぬって
おもしろい感じがする。
魚の絵を書いたら、その絵がかわるわい
しよわ。

カード 3

3. 森の歌 (5年)

毎回、カードに記入しながら製作に取り組むことも試みた。一斉に本時の課題をつかませた後に個々のめあてを簡単に記入させた後、製作に取りかかった。後かたづけの後に項目ごとにふりかえりを記入した。毎時間をふり返ることは次の課題を明確にすることができるが、書くことに時間が取られてしまうという問題もある。

また、個々のつまずきを知ることができるので、個に応じた指導もカードを通して可能となった。

V. お互いの作品を見せ合う場を

子どもたちは個々に自分のイメージと見通しを持ちながら製作している。製作途中や完成後に作品を見せ合う場を設定することにより、自分や友達の良さに気づくとともに、さらに意欲的な製作活動に取り組ませることができると考え以下1~4の方法によって試みた。

四工がんばりカード < 木の可也 >

5年1組 名前 佐伯賢太郎

		11/29	12/11	12/18	
今日の学習のめあて		まなぶこと、刀で、白と せんぶにしたいです。	なまぐ、色もせんぶの て、あふりせたい	先生のいかにしてまなび かりたい	
思いどうりにできたこと		ういすきとにせんぶ、い いのなていした。	白もせんぶ、こくいきた た。	うすきとにまていて た。	
できなくてこまっていたこと		せんぶのせんぶがむずかしい	白もせんぶ、こくいきた た。	せんぶといたにうす くない。	
◎ ○ △ で	じぶんははしかり できましたか。	○	○	○	
	楽しくできましたか。	○	○	○	
	最後までがんばり ましたか。	○	○	○	
	ほかのうけはしかり できましたか。	○	○	○	
反省と感想		反省はせんぶ、はりす かたこと、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ	反省は、白もせんぶとま せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ	せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ	せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ せんぶ、せんぶ、せんぶ、せんぶ

カード 4

— 製作途中を見せ合う —

1. ふしぎな仮面 (4年)

製作途中で工夫している子の話を聞いたり、自分の工夫を話すことによって、自分の作品を見直し、今まで気づかなかった良さに気づくとともに友達の良さを認め自分の作品に取り入れながら さらに意欲的な製作活動、豊かな表現活動ができるようにしていきたいと考えた。

その中で、本人にも他の子にも気づかない新しい工夫を教師が全体の場に出して気づかせるように働きかけたり(「Fさんのやり方で今まで全然出なかったことがひとつ出てきたよ。」)

「今日さんのお話するところに、みんなにない工夫があるよ。」「Hさんの言ったところわかった?」のように取り上げて比べさせながら工夫を見つけさせるようにした。

また、挙手はしていなかったが、製作段階で教師が見つけた工夫を本人に言わせたりもした。

このように教師の側から全体に広めることも



「はがしたダンボールを立てたよ。」

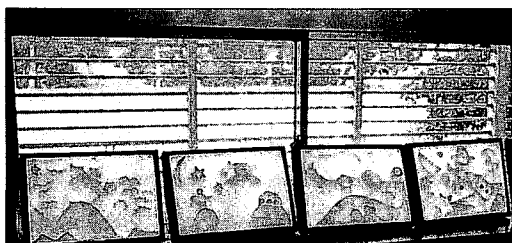
豊かな表現力を育てることにつながるのではないかと考えたからである。

2. 光とかげのふしぎな世界

製作途中の作品は、時間の最後に全員窓際に展示した。友達の作品をひと目で見ることができ、作品の美しさに気づかせるとともに友達の作品の良さに気づかせること、豊かな人間関係

をつくり出すことができるのである。

また、それによって（学習の）最終段階で発表することができなかつた子ども達にも展示することで満足感を持たせることができ、次の製作まで意欲を持ち続けさせることができた。



「光があたると よく見えるね。」

3. ふしぎなかぎをつくろう（3年）



二つ折りにした新聞紙を切り取ったり、切り抜いたりしてできた形を開くと対称形の鍵ができる。最初に切った形を黒板に貼りつけて見させ、友達作品の中からおもしろい形や好きな形を見つけ出し、それを自分でも試してみさせた。いくつかの形を切ってみることで、自分だけの世界にひとつしかないふしぎなかぎを創り出すことにつながった。

— 作品発表会をする —

4. ふしぎな仮面（4年）

製作が終わったら、できるだけ作品発表会の時間を持つようにしてきた。友達作品を漠然と見ていたのでは見えない、気づかない事も、発表する時のポイント（どんな事をみんなに知ってもらいたいのか）、聴く時の態度（どんなふうにか、何を聴いたらいいのか）を明確にすることによって、作品に込められた思いを感じとることができると考えた。このことが、友達の良さに気づくと共に自分の良さにも気づき、作品を大切に

する心や思いやりの心を育てることにつながるのではないかと考える。

Ⅵ. 楽しい学校の環境づくり

自分の作品が掲示されるということは、子どもたちにとっては自分が認められた満足感を得ることにつながるであろう。と同時に、作品が美的環境をつくり出していることに大きな喜びを感じるのではないだろうか。このことが楽しい学校生活につながると考える。校内のいろいろなコーナーを利用して掲示の仕方を工夫したり、行事の飾りに活用したりすることによって創造活動に喜びを持たせたいと考え実践している。

1. 学年掲示板での作品展示

わたしがもうひとりいたら（3年）



動きのあるポーズと共に作品紹介カードを持たせて掲示することによって楽しい雰囲気をつくり出すことができた。

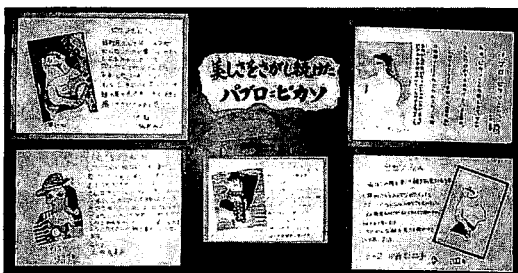
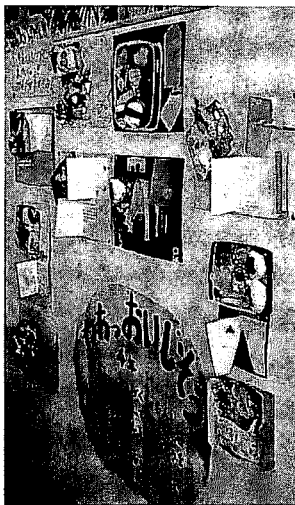
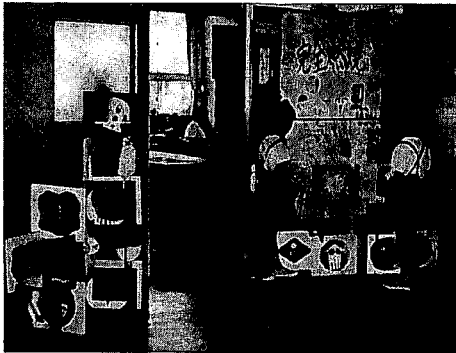
2. 廊下のコーナーでの作品展示

風にゆれるかざり（6年）

組み立てて、一番風がよく通る図工室前に展示した。すぐ隣の教室の一年生は、くるくる回したり、息を吹きかけたりして楽しんだ。

ぼくもわたしも名コックさん（4年）

子ども達の興味を引くおべんとう。立体的で、しかもメッセージ付きの作品は、玄関を通る子供たちの足を止めた。



ピカソ（6年）

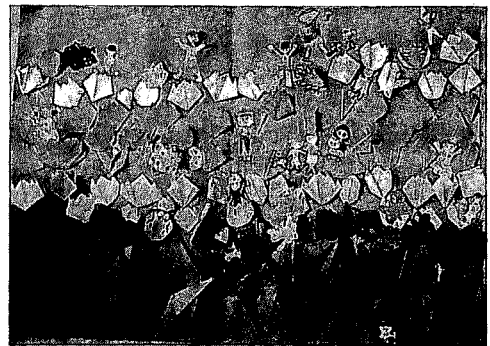
ピカソの作品の中で、自分の好きだと思ふ作品を模写した。そして、そこから感じたこと、考えたことなどを「ピカソさんへ」という手紙に書き、絵と共に掲示した。子どもたちにとって、ピカソは偉大な画家だという思いが、学年を問わず強くあるだけに、模写された絵や手紙文を興味深く見つめていた。

3. 季節だより — 掲示委員会の活動 —

美しさを快く感じる心が、自然と身につくように、楽しい造形環境を子どもとともに創る。

季節の掲示板では、季節を感じ、折り紙や切り紙なども使って、みんなで作る（共同製作）活動を通して、四季の美しさに目を向け、協力することの大切さ・楽しさを味わうようにする。

次に年間の季節の掲示の中から一例を写真で紹介する。



春—お花畑で遊んだら（2年共同製作）

このような実践研究を通して得られた成果の一例として、図工の授業だけでなく、学校生活でのあらゆる活動の場において、「がんばったかいがあって みんなに拍手されてうれしかった。」とか「僕は掲示委員会活動で学んだことがいっぱいあります。例えば いい作品の見方とか忙しい人の仕事を手伝うとかです。掲示委員会は、学校をきれいにするだけでなく、優しい心がもて、とてもすばらしい委員会です。」といった感想を、学級担任から児童の作文で得ることができた。これは、人間教育としての図工教育の目標に迫るような児童の声であるため、指導者として何よりの喜びであった。

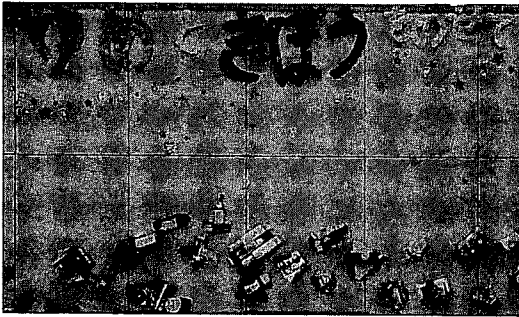
4. 学校行事の中で

6年生を送る会は、6年生の卒業を祝うと共に、これまでの感謝の気持ちを各学年の演技や壁面のかざりで表すなど、全校が力を合わせてつくりあげる大きな行事のひとつである。

図工での学習を図工の時間だけに止めるのではなく、学校生活に生かす場として位置づけたと考えた。



お花のプレゼント（2年）



うちゅうへとび出せ（3年）

「どんなかざりやことばが6年生に喜んでもらえるかな?」と問いかけ、体育館の広い壁面をかざる構想を出し合った。一人ひとりの作品の掲示のし方を工夫したことで、ダイナミックなひとつの大きな作品をつくり出すことができ、自分の作品が完成した時以上に大きな満足感を持たせることができた。

まとめ

子どもたちが喜んで取り組み、満足感を得られるような創造活動ができた時、その過程において豊かな心と表現力を育てることができると考え、実践を重ねてきた。

特に、授業の流れにそって5つの視点から意欲的に創造活動に取り組みさせるように試みた。

- ・表現活動に喜びをもたせる題材
- ・意欲をもって取り組ませる手だて
- ・イメージを広げ、製作の見通しを持たせるためのカードの活用
- ・作品を見せ合うことによって、お互いの良さを認め合う場の設定
- ・楽しい学校の環境づくり

以上の視点で実践を進めた結果、成果として次のようなことが言えるのではないだろうか。

子どもたちにとって身近で、新鮮味のある素材に出会わせると共に、題材がイメージを広め完成まで期待感を持ち続けられるような、夢のあるものを提示することによって、目を輝かせて取り組む姿を見ることができた。

また、カードを活用し、イメージを図やことばでかかせることによって、自分のもつイメージをいっそう明確に具体化することができた。さらに製作過程では、ポイントとなる項目を設けてふり返ったり、自分のめあてを持たせることによって、製作活動をふり返らせ、次のめあてを明確にすることもできた。

作品を見せ合う場を設定することによっては、自分の良さに気づくと共に友達の良さも認め合えるような、あたたかい人間関係をつくり出すきっかけを持たせることができたと考える。また、さらに良いものをつくり上げようと、友達の良い所を自分の作品に取り入れてみようとする態度も見られるようになってきた。

掲示委員会に入って、自分たちがつくった掲示版を学校のみんなに見てもらいたいという思いで掲示委員会を希望する子が増えてきたことや、掲示版に目を留め、掲示物を参考にしながら、クラス的环境づくりに進んで取り組もうとする子も見られるようになってきた。

図工の授業だけでなく、学校生活において創造活動を生かそうとする姿や、家でもやってみたいと、創造活動に広がりも見えるようになってきた。

そこで、今後の課題としては、次のことが挙げられる。

子どもたちと素材との出会わせ方と素材そのものを、発達段階に応じて系統的に吟味する必要があること。

創造活動の中で、基礎・基本となる技能的な指導をどのように位置づけなければいけないかということ、子どもたちの実態とからみ合わせ、ひとりひとりがよりよいものを求めてのびのびと創造活動に取り組み、満足感、成就感を得ることができるような個に応じた適切な指導と共に探っていかなければいけないのではないかということ。

カードの活用については、学習の流れのどの段階で、何について、どれだけかかせることがより豊かな表現力につながるのかということの検討と、かかせたことに対して教師がどのよう

にかかわることがより有効になるのかということ。

子どもとともに作りあげる環境づくりのあり方。

実践は、今まさに一歩を踏み出したばかりで解決されるべき課題は大きく、非常に多く感じている。しかし、子どもたちのもつ可能性は大きく、日々の授業の中から着実に成長している姿を見ることができたことに大きな喜びを感じている。これからも実践を重ねながら、課題として残されたひとつひとつのことについて、研究を進めていきたい。そして、21世紀に明るくたくましく生きる子どもたちの成長を心から願いたい。